

---

# 天国からのツイート

岸本 政臣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天国からのツイート

### 【Nコード】

N7670X

### 【作者名】

岸本 政臣

### 【あらすじ】

常識をもつ人ならだれでも、目の混乱には二とおりあり、そして二つの原因から生じること間違い出すであろう。

すなわち明るいところから暗いところへ入ったために生じるか、または暗いところから明るいところへ入ったために生じるかである。

これは心の目についても、身体の目についてとまったく同じく、真である。そして、このことを覚えている人ならば、洞察力の混乱し弱まっている人を見たときに、そうむやみに笑えないだろう。

彼は、その人の魂がより明るい生活から暗い生活へ入り、それで暗さに慣れていないゆえに見えないのか、あるいは暗闇から白日のもとへもどったので、あまりの明るさのために目がくらんでいるのか、どちらかであるかをはじめに問うであらう。

そして、彼は一方を健康や境遇において幸せであるとし、他をあれむだらう。あるいは、もし彼が闇から光のもとへ来た魂を笑うような心の持ち主であれば、この場所を笑うほうが、上方の明るいところから穴ぐらの闇へもどって来た人を迎えて、笑う場合に比べればまだしも理由があるのだらう。

プラトン『国家』より

## @1・けえかほおこく

確かに僕たちは、同じ門をくぐり、同じ学舎で学び、同じ門を出て行った。

教わった事も、受けたテストも、昼飯さえも同じ物を食べていた事に間違いはない…

だけど、人間は、どこかのタイミングで、十人十色になっていく。

「ああ、俺は、こんなはずじゃなかった！」そんなときは『ゲームオーバー』

「コンテニューしますか？」『Yes』 『No』なんて…

『No』なんて、見たこともないくせに…

今どき少ないパチンコ店に流れる、軍艦マーチ。そんなパチンコ店でも、機種だけは新台が並ぶ。そんな新台を打つために、朝から並んだ…

「出ねえじゃねえかよ！ポツタクリ！」

パチンコの台をガンガン叩く男、宗像和宏。

1年前までトラックの運転手をやっていたが、ちょっとした違反が多く、その積み重ねから、免許取り消しになり、職を失った彼は、

今は日払いの仕事で首をつないでいる。

バブルの時はパチンコ店も、床にパチンコ玉がゴロゴロ落ちてたりして、何だか景気の高さそうな雰囲気を出していたけど、最近は一円でもムダの無いようにと言わんばかりに、綺麗に玉一つ落ちていないパチンコ店。

ちょうど一万円をパチンコにのまれてしまい、和宏はイライラしながら財布の中を見る。

財布の中に五千円札が一枚だけ入っているのを見ると、パチンコ台に注ぎ込むかを少しためらう。

「ああ！もう！」

ブツブツと言いながらパチンコ店を後にして、出てすぐに煙草に火をつける。

すると、ポケットの中で携帯電話のバイブが鳴り出し、和宏は少し驚く。

「もしもし…ああ、大丈夫…わかってる、覚えてるって、ちゃんと行くよ」

今日は、和宏が通っていた綾南中学校 吹奏楽部の同窓会であった。

13年前に地元から離れた和宏は、久々に地元の駅を降りて、待ち合わせの居酒屋に向かう。

仕事もろくにしていなくて、毎日をフラフラと過ごしている和宏は、なんだか負い目を感じていて同窓会にも来たくはなかったが、

同期の仲間たちからの強引な誘いに断れず、やむおえず訪れることにした。

昔ながらの雰囲気が漂う居酒屋の扉を開けると、店内はすでに賑やかになっている。

「おっ！皆、来たぞ！天才トランペット吹き！」

大きな声で皆を呼んだのは、高山重徳。

和宏とは中学校の時、仲がよくて、担当していた楽器はトロンボーン。皆からは『シゲ』と呼ばれていた。

和宏の登場を、皆は拍手で迎える。

中学校の部活といえども、流石、音楽人間達。

こんな居酒屋で開くような同窓会すらも、きちっと正装で来ている。

古着姿で、プラッと来た感じなのは和宏だけだ。

和宏は、すでに来たことを後悔している。

「そういう呼び方、やめろよ…」

ブツブツと言いながら和宏は重徳の隣に座る。

「だって、本当だろ。高校だって特待生で入ったし、定期演奏会の第二部なんて、和宏のソロリサイタルみたいな物だったし」

和宏と重徳が話しながら乾杯をすると、周りも和宏と乾杯する為に寄ってくる。

「和宏、元気にしてたのかよ」

がっちりとした体格で、顔が髭で覆われている男が、後藤淳一郎。『ジュンちゃん』なんて可愛く呼ばれていたが、昔からこの体格で、顔も中学生と思えないほどに老けていた。担当楽器はチューバ。

「和宏と連絡とるの大変だったんだぞ、おまえ携帯の電話番号もコロコロかわるし、アパート引っ越しても、連絡よこさないし…」

重徳がブツブツと文句を言い出す。

「逆に、よくわかったな」

「陽子が、おまえの妹から、連絡先聞いたんだよ」

和宏には、歳が七歳はなれているが、真由美という妹がいる。和宏が幼い頃に父親が再婚して、後妻との間に産まれた子供だった。

真由美も同じく中学校で吹奏楽部に入り、今でも音楽を続けてパりに留学している。

「陽子が真由美と？会わせた事あったっけ…」

歳のはなれた妹とは、和宏の周囲の人間とは、あまり接点がないはずなのに…と、和宏は疑問に思う。

「私、一時、中学校にコーチに行ってたのよ」

噂をすれば、話しに割り込んできたのは、河村陽子。担当楽器はホルン。ぽっちゃりとした体格で、とにかくよく喋り、騒がしい女の子だった。

「何、そんなOG気取って、うざったいオバサンみたいな事やってたの」

和宏が陽子をからかう。

「違うわよ！大学の頃に教育実習で行った時、真由美ちゃんが生徒でいたの。その時に吹奏楽部の練習も見ることがようになって、実習が終わってから、コーチとして通っていたのよ」

「ああ、そうなの…冗談で言ったんだから、そんなにむきになるなよ」

からかう和宏に対して、陽子は少しふてくされる。

「でも、真由美ちゃん今はパリに留学中ですよ。ああ、いいなあ音楽留学なんて…」

「陽子だって、音楽の先生、頑張ってるんだろ？」

「そうだけど…和宏は？今、何やっているの？」

「俺？俺は今、就職活動中」

和宏が煙草に火をつける。和宏を今日の同窓会に半ば無理矢理呼んだ重徳は、和宏の勘にさわりそうな質問をズカズカとする陽子に対して、気分を悪くして帰ってしまうのではないかと、少しヒヤヒヤとしていた。

「そうなんだ…あのままだったら、本当に博士にでもなっていたかもしれないのにね」

「あのままって?」

陽子の言葉に、淳一郎が興味をしめす。

「和宏ね、小学校の時、すごい頭が良くて、先生とか皆から『ハカセ』って呼ばれてたの」

「そうなの? 中学入った時は、ただの音楽バカだったじゃん」

中学校から一緒になった淳一郎は、少し驚く。

「まあ、四年生までなんだけどね、そこから急に…」

「急に?」

「算数のテストで0点とったの!」

「陽子!」ケラケラと笑いながら話す陽子を見かねて、重徳が注意する。

「アルジャーノンみたいだな…」

淳一郎が呟く。

「何々、アルジャーノンって?」

「ダニエル・キイスだろ? 『アルジャーノンに花束を』おまえ、ふざけるなよ!」

淳一郎の例える意味が解った和宏が、半笑いで怒る。

「精神遅滞の主人公、チャーリー・ゴードンが、開発されたばかりの脳手術の臨床試験被験者第一号に選ばれるんだ。その手術の動物実験として対象になっていたのが、ハツカネズミの『アルジャーノン』」

「で？手術したらどうなるの」

陽子は、説明する淳一郎の話を興味津々に聞く。和宏は、勝手に言ってると思う様な態度で、黙って煙草を吸っている。

「手術に成功したチャーリーのIQは、68から上昇して185の天才になるんだ・・・けど・・・」

「けど？」

「アルジャーノンに異変が起きて、調査を始めると、手術に欠陥があった事がわかり、チャーリーの知能もどんどん退行していった。元の知能にもどっちゃうんだ」

話を聞いた陽子が、ゲラゲラと笑っている。

「陽子！いい加減にしるよ」

陽子の態度に、気を張り詰めていた重徳が怒り出す。

チャーリーは知能は天才的になったが、感情は幼児のままで、そのバランスがとれずに自尊心が高まり、周囲の人間を見下し、やがて孤独になっ行って行く…

知能の事よりも、その部分を自分と照らし合わせていた和宏は、幼い頃にこの小説をよく読んでいた。

「これで晴海先輩がいたら、金管五重奏『金賞』メンバーだね」

陽子のその言葉には、重徳だけでなく、淳一郎も苦笑いになる。

吹奏楽の大会には、合奏のような団体で参加するコンクールと、各セクションの少人数で演奏する、アンサンブルコンテストがある。綾南中学校はコンクールよりも、アンサンブルコンテストの実績が素晴らしく、毎年『校内アンサンブルコンテスト』が開催され、その中で選ばれたグループが、本選である東京都のアンサンブルコンテストに出場できた。

和宏も中学二年生の時に、このコンテストに出場した事があり、校内アンサンブルコンテストでも他のメンバーと比べて断トツの実力で金賞を獲得した。

金管五重奏 ファーナビー作曲『空想・おもちゃ・夢』

T p 1 宗像和宏

T p 2 早川裕輔

H r 河村陽子

T b 高山重徳

T u 後藤淳一郎

まるで中学生とは思えない演奏に、誰もが本選への出場を納得し、全国大会への出場も夢ではないと、学校を挙げて期待されていたメンバーであった。

しかし、当時吹奏楽部の顧問であった、井上武彦だけは五人の出場に納得していなかった。

理由は、三年生であった尾崎晴海をメンバーに加えていない事で

ある。

この年の三年生部員は極端に少なく、トランペットの尾崎とパークシヨンに一名の計二名のみであり、部長も勤め、実力もあつた晴海だが、同じ学年でチームを組む事が多いこのコンテストには、これまで一度も出場できなかった。

同級生の少ない中で、リーダーシップを執り部をまとめてきた晴海を、井上は卒業までに、どうしてもコンテストに出場させたい 생각이強かつた。

井上は尾崎を含めた六人で構成を組み直す事が、本選出場の条件だと五人に話した。

井上の気持ちも、晴海の立場も理解はできるが、条件と言われても納得はいかない。

『空想・おもちゃ・夢』は、五人が入部した時から、コンテストで演奏したいと考えていた金管五重奏曲。晴海を加えるとなれば、その構成に見合った別の曲を探さなくてはならない。いくら五人に実力があつても、本選までの練習時間も考えると、あまりに無理な条件であつた。

その二日後からの事だつた…トランペットの裕輔が、急に学校を休むようになり始めた。

確かな理由は分からないが、コンテストに裕輔が抜ければ、その穴に晴海が入り話がまとまると考えているのではと、和宏勝手に捉えていた。

そんなことまでしてコンテストの出場は望んでいないと、毎朝、和宏は裕輔の自宅も訪ねたが、彼本人が家から一度も出てくる事はなく、結局、登校拒否生徒になつてしまった。

裕輔のいないコンテストには出場拒否すると和宏はもめたが、井上からの晴海を考え、加えて出場してほしいという願いに負けた。しかし、晴海を加える事が条件だったという事は、彼女の立場を考えて、晴海には裕輔の代行として出場してほしいと、お願いする形でコンテストには出場した。

五人の演奏は見事に全国大会へ出場し、金賞を受賞したが、裕輔はその後、卒業まで学校に来なかった。

当時、女子の意見というか、同姓同士の思いなのか、急に来なくなった裕輔の気持ちなんて理解しようともせずに、裕輔に腹を立てて晴海のメンバー入りを強く推していた陽子は、何も考えずに思い出話を話す。

「陽子、おまえ本当に学校の先生やれてるのか？生徒に嫌われてないか？」

あまりに無神経だと思った重徳が、陽子に呟く。

「失礼ね！女、金八先生とは私の事よ」

陽子の発言に、三人は苦笑いになる。

「和宏もね…勉強ダメだったら、せめて音楽は続けておけばよかったのよ」

あまりにお節介な陽子の言葉に、和宏もさすがに苛立つてくる。その姿に感づいた重徳は、和宏と淳一郎を店の外に誘った。

「ちょっとどこに行くのよ」

「小便だよ！小便」

重徳は二人を連れて、陽子を誤魔化すように外にでる。

「あの無神経と話してたらダメだ、三人で他で飲みなおそう」

あの店での空気は、どちらにしても窮屈だと思っていた和宏は、重徳に賛成する。淳一郎も黙って二人に付いてゆく。

三人は路地裏にある小さな酒場に入ると、カウンターに並んで座った。

「気分悪くしたら悪かったな、無理矢理誘ったのに」

「何でシゲが謝るんだよ。あれ？まだ陽子の彼氏気分か？」

重徳と陽子は中学時代に一時付き合っていたが、裕輔が来なくなった時の陽子の態度が重徳には気に入らなく、アンサンブルのチームを壊さないようにと我慢していたが、全国大会が終わると重徳から別れ告げた。

「ちやかすなよ…でも、俺も気にさわるかもしれない話、どうしても一つしておきたかったんだ」

「何だよ…」

重徳と淳一郎が目を合わす。

「あのな、裕輔が学校に来なくなったのは、コンテストの事が理由じゃなかったんだ。あいつの家、母子家庭だったろ、でも、母親が再婚して裕輔も『早川』から『菊池』に苗字が変わったんだ」

「知ってるよ…」

「そうか…ならよかった。だから学校に来て、その事を皆に指摘されるのが、きつと嫌だったんだよ」

三人は少し沈黙になる。和宏も黙ったままウイスキーをグツと飲み干す。

「じゃあ、何で自殺した…」

酔ってきたのか、和宏が急に話す。

「えっ…」

その質問に重徳は言葉が出ない。

「耐えられなかったんだろ…」

話出したのは淳一郎だった。

「耐えられなかったんだろ…だって、あのアパート見たか？あんな狭いアパートに急に男がころがりこんで、お父さんって呼びなさいと押し付けられるように、その男と同じ苗字になる。年頃の子供がいるのに、あの狭いアパートで新婚夫婦は毎晩セックスをするんだ…俺だって耐えられないよ…」

和宏も五歳の時から後妻と暮らしているが、幼かった和宏はすぐになつき、その後も問題なく暮らしていた。勉強を頑張っていた理由も、少しでも後妻に褒められたいと思う願望もあったが、真由美が生まれて『元気で、健康であればそれでいい』と、のびのび育てられている姿を見て、勉強ばかりしていた自分が、急に無気力になっってしまった事もある。

真由美が三歳になって、芸術家に育てようと両親が言い出し、ピアノを習わせ始めた頃から和宏も負けじと鼓笛隊に入り、トランペットの練習に明け暮れた。今度は勉強ではなく、トランペットを夢中になって練習しはじめた和宏は、成績はどんどん落ちていったがトランペットの腕前は上達し、小学六年生の頃には全国大会に出場している高校生に混ざってもおかしくないほどの技術であった。

両親もその才能を生かそうと、知り合いの音大生にアルバイトを頼み、和宏のコーチとしてレッスンを受けさせていた。

だから、和宏にとって、後妻との関係は『努力の源』だったのだ。

しかし、裕輔の気持ちも想像はできる。

派手な格好で、道端で煙草を吸いながら歩いているのをよく見かけた裕輔の母親だ。

見たこともないのに、勝手な想像で悪いが、再婚した男も、どんな雰囲気だか想像がつく。

そこにきて、裕輔は真面目で大人しい性格の子供だった。

母親がどんな相手と再婚しても、決して嫌だとは口に出さないと  
思う。

そんな環境の変化の中で、じつところえていたのだろう。

だからなのか、裕輔は十六歳の時に自殺した…

和宏も理由はなんとなく想像できていた。

「葬式の際に、名前が『菊池裕輔』になってたろ、あれ見てハツと  
したよ…」

和宏が呟く。

「そう考えると、やっぱり和宏はチャーリー・ゴードンだな」

何かを思い出したように、淳一郎が話す。

「勘違いするな、バカにしてるんじゃないぞ。あの葬式、中学校を卒業した皆は、まるで同窓会のように騒いでいた。その姿を見た和宏は、誰とも話さずに、黙って一人で帰っていった…」

「知能と精神のバランスがとれず、正義感をふりかざすチャーリーは、やがて人を見下すようになり、そして孤独になる…って言い出したのか」

和宏は二杯目のウイスキーも、また一気に飲み干す。

「おい、おい。折角久しぶりに会ったんだから、喧嘩するのはやめろよ」

陽子の次は淳一郎かと、重徳の気が休まらない。

「大丈夫だ、俺は気にしてない。ところで今日の幹事ってシゲだろ？よく、あんなに人数集めたな」

「『Twitter』で呼びかけたんだよ」

「『ツイッター』…ああ、あの、つぶやくとかいうやつか」

「そうだよ、近頃のSNSは凄<sup>ソーシャル・ネットワーキング・サービス</sup>いんだ。全然連絡つかなかった友達を見つけれられるサイトだってある」

全く興味のない和宏には、重徳の話は何を言っているのか、さっぱりわからない。

「でも、俺はTwitterなんて、登録してないぞ」

「だから、和宏は、陽子に真由美ちゃんと連絡とってもらったんだって、ちよつと携帯貸せ」

「重徳が手を差し出す。」

「何でだよ？」

「いいから」

和宏は渋々と携帯電話を渡すと、重徳は何やらかを入力している様子だった。

別に見られてやましい内容は無いが、何を勝手にしているのかは気になる。

「何してるんだよ……」

「よし！できた！」

『kazuhiro』で登録された、Twitterの画面が出ている。

「和宏は、携帯電話とかも、すぐに変えて連絡よこさないから。これならパソコンから見れるし、連絡ができる」

「俺、こういうの本当に苦手だから、いちいち書き込んだりしないぞ」

「いいよ、とりあえず用事があれば、電話かメールをするから。保険だよ、保険。」

和宏は簡単に説明だけ聞くと、携帯電話をポケットにしまい、再び酒を飲みはじめた。

「そういえば、尾崎先輩って、今日、来てたか？」

「あの人は、誰も連絡がとれなかったんだよ…同級生も、パーカッションの伊東先輩だけだろ、伊東先輩も、世界の何処をフラフラしているのかわからないし」

和宏は、晴海のことは、それで気になっていた。

アンサンブルコンテストに出場する事になった晴海を、和宏・重徳・陽子・淳一郎の四人は、快く迎え入れようと決めてはいたが、裕輔のことが気になっていた和宏は、晴海に対しても無意識に態度に出していた。

同じ、トランペット同士でのセクション練習もおこなわず、晴海と合わせるのには、他のメンバーがいる時だけ、先輩である晴海からのアドバイスも心の中で『自分の方が上手い』と、晴海を見下して聞こうとしない。

心の中で、晴海の出場が『裕輔が登校拒否の理由』と、勝手に思っていた和宏は、晴海に対してどこか憎らしさが出ていた。

あのコンテストが登校拒否の原因ではないと思いはじめると、それまで同じパートで、明るく、優しく、接してくれていた晴海に対しての態度が、申し訳なく思っていた。

「何やってるのかなあ…結婚でもして、幸せに生活してたりして」

「どうだろな…」

三人は店を出ると、そのまま駅に向かった。

「じゃあな、和宏。また連絡するから、就活頑張れよ」

「それじゃあ、また」

「おお、じゃあな」

結局、終電近くまで飲んでいた和宏は、出発しようとする電車で慌てて乗り込む。なんだか少し飲み過ぎたと、ドアに寄りかかり、外の景色を眺めている。

「けえかほおこく…ぼくはしばいしたとおもうのできつとぼくを使てくれないだろー…」

少しよっぱらっている和宏は、チャーリー・ゴードンの『けえかほおかく』の文をを呟いている。

確かに淳一郎の言う通りだ。俺の生き方は、チャーリー・ゴードンと同じ、ひらがなばかりで、自分の思った事だけ書いた一人称の文。文章の書き方までそっくりだ。

そう思った和宏は、周囲の目も気にせずに、電車の中で一人、クスクスと笑っていた。

## @2・じぶやくじと

翌日、和宏は日払いの派遣のアルバイトに出た。

「派遣の宗像です。はい…これから現場に向かいます」

朝七時、自宅を出ると、出勤報告の電話を派遣会社に入れる。

昨日飲み過ぎたせいか、酒がほんのり残っている。

「やっぱり、早めに帰っておくべきだったな…」

駅に向かう途中の公園に立ち寄り顔を洗うと、そのままガブガブと水を飲んだ。顔を拭くタオルなどもなく、Ｔシャツで拭うと、また駅まで歩き出した。

駅にたどり着き、今日は引越しのアルバイトの現場に向かう。

日曜日だから世間は休みの人が多いが、引越しセンターにとっては繁盛日。場合によっては、派遣でも、午前と午後で二件に回される事もあるくらいだ。

空いてる車両に乗り、椅子に座ると、二日酔いの頭をグリグリと押してみる。

『現場に着くまでに治まるかなあ…』そんな事を考えていると、ポケットの中の携帯電話が鳴り出し、確認すると淳一郎からのメールだった。

『昨日、酔っていたみたいだったけど、ちゃんと家に帰れたか？』

「余計なお世話だよ…」と、呟きながら、淳一郎にメールを返信し

た。

『大丈夫です。心配かけて悪いな』

考えてみれば、淳一郎は音大を出て、一流とは言えなくても、プロのオーケストラに入団している。

重徳も、楽器リペアの仕事をしながら、アマチュアバンドで活動中と、皆、何かしら音楽に関わって生活している。

音楽とは無縁の生活をしているのは和宏だけだった。

和宏は、吹奏楽で全国大会出場常連である『関東実業高等学校』に音楽特待生として入学した。

入学してからの部員達の目標は、全国大会出場の前に校内選抜で一軍になり、夏の吹奏楽コンクールに出場することである。

部員の多い年には、三軍までになる大人数の中で、一軍に上げられるのは、大半が三年生と有能な二年生位。しかし、入学した時点で高校生の技術や感性のレベルをはるかに超えていた和宏は、顧問である有村靖夫も、期待の一年生として一軍入りを考えていた。

そんな和宏を上級生は面白く思わない。特に、わずかしが一軍に入れない二年生の和宏に対するあたりは非常に冷たかった。

上級生は和宏だけでなく、一年生全員に楽器の練習などさせずに、楽器を磨かせたり、部室の掃除だの、必要以上の筋力トレーニングなどの音楽の練習とは関係のない事を押し付けた。

耐えかねて退部する一年生も多かったが、音楽特待生で入学した和宏は、退部すれば、学校も退学となってしまう…

そんな生活の中で、和宏は次第に授業を休んで楽器練習の時間にあて、部活の時間にだけ登校してくるようになった。

それはまずいと思った有村は、和宏を呼び出し授業にも出るようにと指導した。

「しかし先生、楽器は一日練習しなければ、取り戻すのに三日かかると言われています。毎日、掃除や筋トレだけでは、かないません……」

その事実を知った有村は、それでは将来的な部の発展にはならないと思い、今度は二、三年生を呼び出して、一年生にも平等な練習時間を与えるようにと指導した。

この事で一年生にも、練習の時間が設けられるようになったが、有村に注意を受けた苛立ちから、上級生の和宏に対する扱いは、まるで空気のような存在に扱われ、ただ毎日、自主練習の為に部活動に来ているようになった。

しかし、練習時間を与えられるようになった一年生は、和宏を『一年生の代弁者』として祭り上げてた。

「和宏、辛抱して先輩が卒業すれば、俺達の時代が来る。それまでの我慢だ」

和宏は同級生達の、その言葉に励まされていた。

ある日の練習後、同級生達に誘われて、学校から少し離れた所にある、お好み焼き屋に食事に行くことになった。

部活動が終わると、ほぼ毎日のようにレッスンに通っていた和宏だが、コーチの音大生が、まもなく大切なコンテストがあると、一週間ほどレッスンの休暇を希望していた。

その為に、入学して初めて同級生の仲間と食事をする和宏は、嫌な事が続いている毎日の気分転換になると、心はずませている。

店に着くと、皆は店の叔母さんと常連客のように接している。

注文を済ますと、ほとんどの者が鞆から煙草を取りだし吸い始めた。和宏も勧められるが、その誘いはきっぱりと断る。

「上手くなりたければ、煙草はやめた方がいい。肺活量が落ちるか  
ら」

『本当に彼らは、真剣に音楽をする気があるのか』と、自分との意識の違いに苛立つ和宏は、そのまま食事もせずに、和宏は店を後にした。

それから数日後、吹奏楽部の一年生ほとんどが、喫煙が発覚し停学になった。

自分は吸っていないのだから関係ないと、その問題に興味も示さなかった和宏だったが、発覚した発端は和宏の『チクリ』だと部員の誰もが疑った。

放課後、停学中の部員達に待ち伏せされていた和宏は、人気の無い駐車場に連れて行かれると、チクリを入れたと思われる疑いから集団リンチのように暴行を受けた。

「大体、オマエの見下したような態度が気に入らないんだよ！」

「ちょっと上手いからって、自分は違うみたいなお態度しやがって」  
口の中が切れて、前歯も奥歯も折れて、しばらく楽器なんて吹けるような状態じゃない和宏に対して、部員たちの暴力は止まらなかった。

『べつに見下したつもりもないし、落とし入れるような真似もしていない、俺には何にも関係ない…』

和宏に僻む人間達が、勝手に思い込み、勝手な和宏の人間像を創っている。

その次の日からしばらく学校を休み、学校に居場所の無くなった和宏はそのまま退学した…

だから和宏は、音大生どころか、高校も中退している。その成れの果てが今だ…

電車の中で、まるで頭の頭痛と合わさるように昔の悪夢を急に思い出した。

電車が駅に到着して改札を出ると、気持ちを落ち着かせようと煙草を口にする。

「上手くなりたければ、煙草はやめた方がいい…」なんて言っていたが、もう音楽に興味はないという、自分勝手な表現なのかもしれない。

「もしもし、宗像です。現場の駅に着きました」  
会社に一報を入れると、派遣現場に向った。

そこに到着すると、若者から中年の男性までもが、作業着に着替えて、引越センターのトラックが到着するのを待っている。

和宏も、道端で作業着に着替えると、派遣アルバイトの集団に紛れ込んだ。

やがて数台のトラックが到着すると、センターの社員に指示に従い、作業に取りかかる。

センターの若い社員達は、派遣アルバイトの人間に対する当たりが厳しい。

「おっさん！弁償できねえくせに、ぶつけてんじゃねえよ！」

四十代位の男性が、二十代前半位の社員から罵声をあびている。その姿は、決して見ていて気持ちいい物ではない。

「あんだ、酒臭せえな……」

若い社員が、今度は和宏に当たってきた。

「仕事なめてんのかよ！臭せえから退いてろ！」

そのガツシリとした体格に突き飛ばされ、和宏は地面に倒れる。決してなれはしないが、派遣のアルバイトなんてこんなもんだと聞き直り、和宏は立ち上がって仕事にかかる。

午前中が終わると、和宏はそのままの現場要員として残された。

昼食の時間だが、食欲も金も無い和宏は、また一人で公園に向かう。

公園の水道で顔を洗うと、またガブガブと水を飲む。

そのまま目の前のベンチに寝転がると、ポーツと空を眺めていた。

「お兄ちゃん、昼飯食べないのかい？」

話しかけてきたのは、さっき罵声をあびていた、中年の男性だった。

その男はニコニコと笑いながら、和宏におにぎりを一つ差し出す。和宏は慌て起き上がると、そのおにぎりを受け取り頭を下げた。

半分空いたベンチに、その男も腰かける。

「今日は暑いね、だから疲れるよ」

ニコニコと笑いながら、男はおにぎりを食べる。

「あの…腹立ちませんか？あんな若い奴に、社員だからってあんな言われ方して…」

和宏の質問を聞いて、男はまだニコニコと笑っている。

「私はね、これでも夜は、息子と女房と一緒に、自分の店をやっているんだよ」

「そうなんですか…どんなお店を？」

「小さな居酒屋だけだね、だけど、それだけじゃとても食べてはいけないから」

「そうなんですか…」

和宏も、もらったおにぎりを口にする。

手作りで、塩気の多い昆布の入ったおにぎりが、妙に腹にしみる。

「嫌だ、嫌だといっていたら、そのうち生きるも嫌になっちゃうからね……」

和宏はその言葉を聞いても、返す言葉がなかった。

休憩時間はあっという間に終わり、午後の作業が始まる。

さっきの男は、また罵声をあびながら作業をしている。

この姿を息子と奥さんが見たら、どう感じるだろう……休憩中の会話から、何だか情が出たのか、その姿を見て和宏は、勝手に色々と考えていた。

『名前を聞いてなかったけど、聞くと余計な情が出そうだから、やめておこう』

そもそも、その中年は、和宏の何倍も努力して生きている立派な人間なのだ。しかし、和宏は自分を棚に上げて、男の事を哀れんでいる。

自分は他の人間より駄目だと思ったりする中で、自分は他の人間とは違うといった考え方も抜けきれてはいなかった。

午後の作業も終わり、終了報告の電話を入れる。そして翌日に派遣会社の事務所を訪ねれば、今日の分の給料が支払われるのだ。

『やっぱり、今日の現場は頭にくる。次に仕事が来たら断ろう』

和宏は、おにぎりをもらった男にすら挨拶もせず、一人駅に向かい歩いた。

途中、コンビニエンスストアに寄り、昼飯も抜いたくせに発泡酒を買う。

栓を開けて、半分位を一気に飲むと、目に止まった石段に腰をかけた。

一息ついたと思ったら、携帯電話のバイブが鳴り出す。

『菊池裕輔きくちゆうすけ (@yusuke) が Twitter であなたをフォローしました!』

「何だ?このメール」

菊池裕輔: その件名に驚き、和宏は手に持っていた発泡酒を落とすしてしまう。

和宏は慣れない様子で、Twitterの画面を開く。

《yusuke @kazuhero 久しぶり。元気!》

ツイートを見ても、全く意味が理解できない。

これはもしかして、重徳のイタズラなのか、イタズラだとしたら悪すぎると、怒りが込み上げてきた。

和宏はすぐに、重徳に電話をする。

「おお和宏、昨日ちゃんと帰れたか?」

「そんな事はどうでもいいんだよ。なんだ!あのツイッター!悪ふざけが過ぎてるぞ!」

和宏は携帯電話に向かって、まるで叫ぶように話す。

「ツイッター?何の事?俺、和宏の事、まだフォローしてないよ!」

「惚けるなよ！登録したのシゲじゃねえかよ！」

「登録すれば、誰でもフォローできるだろ」

Twitterの仕組みを理解していない和宏は、裕輔の名前のツイートを重徳しかできないと決め付けて話す。

「何だかよくわからないけど、シゲは送ってないのか？」

「何だかよくわからないのはこっちだよ、一体どうしたんだ？」

重徳が犯人でないと解ると、裕輔からツイートされてきたなんて非現実的な話しをしても笑われるだけだと思い、内容までもは話さなかった。

「悪かった、俺の勘違いだ」

誰でもフォローできるとなると、淳一郎か…しかし淳一郎がそんなイタズラみたいな事をしているのを見たことがない。

ならば陽子かとも思うが、仮にも教育の現場に立っている人間が、そんなに夕チの悪いイタズラを思い付くだろうか…

まさか本当に裕輔でないのかと、少し寒気がしたが、怖いもの見たさもあつたのか、もう一度Twitterの画面を開いた。

《y u ^ s u k e @ k a z u h e r o 久しぶり。。元気！》

やっぱり裕輔なのか…和宏は、恐る恐る返信をする。

《kazuhero @yusuke 誰ですか…いたずらなら  
悪すぎます。やめて下さい》

和宏が返信をすると、またすぐに返ってくる。

《yusuke @kazuhero イタズラ。。思うよね、  
でも本当なんだよ》

和宏は驚いて、手が止まった…

信じられないが、これは本当に裕輔なのかもしれない…  
すると、幽霊ではないかと恐がっていた気持ちがスッと消えて、  
喜びに変わっていた。

《kazuhero @yusuke 元気なのか？》

嬉しくなった和宏は、帰りの電車の中で、ニコニコ笑いながらツ  
イトをする。

《yusuke @kazuhero 僕に元気かって。。おか  
しいでしょ(笑)》

「そうか…元気かなんて、死んじゃってるんだもん…」

ブツブツと言いながら、携帯電話を見ている和宏を、隣に座って  
いる子供が不思議そうに見ている。

恥ずかしくなった和宏は、目を反らし、別の車両に移る。

何と返信してよいのやらと、こちらが悩んでいると、裕輔から再  
び返信されてきた。

《yu^suke @kazuhero 元気がわからないけど、  
楽しく過ごしているよ。》

その言葉を見て、和宏はホッとする。

《kazuhero @yu^suke 今どこにいるんだ?》

また変な事を送ってしまっただろうか、和宏がポリポリと頭をかいていると、次の言葉が返ってきた。

《yu^suke @kazuhero。。。天国なう》

それから、裕輔のツイートはなかった。自宅に帰り、インスタントラーメンにお湯を注ぐと、三分待っている間も考える。一体、今日の出来事は何だったのだろうか…

世の中には不思議な事があるとは言いが、そんな事はテレビや映画の話しであって、実際の話ではない。

時間が経つと、やはり誰かのイタズラではないかと疑りもする。

だけれど、本当に裕輔だとすれば、和宏にとって、そんなに嬉しい出来事はない。

もっと聞きたい事だって、話したい事だって、謝りたい事だって山ほどある。

とっくに三分が過ぎたラーメンの蓋を開けて、すすりながら、ぼんやりと考えていた。

翌日、  
朝起きると、和宏は再びTwitterを見る。

《yu^suke おはよう。今日、そちらは良い天気ですね。》

裕輔のツイートを見て、和宏は嬉しくなる。

《kazuhero @yu^suke そちらはどうですか？》

《yu^suke @kazuhero 毎日が、ぽかぽかです。》

和宏は、昨日の給料を受け取りに、派遣会社の事務所に向かった。

空は本当に真っ青で、一つだけ雲がぽかんと浮いている…

「あそこから、見ているのかなあ…」  
和宏も不思議な事を考えるようになっていた。

事務所は隣街の、自転車で十分位走った所にある。

事務所を訪れて給料だけ受け取ると、次の仕事の予約もせず以後にした。

『こんな腹の立つ仕事はまっぴらだ。別の仕事を探そう』  
自転車に乗り、帰ろうとすると、昨日の中年男に会った。同じように給料を受け取りに来たらしい。

「やあ、君。お給料を取りに来たのかい？」

「はい。あつ、昨日はおにぎり、ごちそうさまでした」

「ご馳走なんかしてないよ、本当に食べ物に困ったら、その角を左に曲がって、三件目にある居酒屋が家だから、いらつしゃい。君一人が食べる米くらいならある」

そう言つて、男は事務所の階段を上つていく。

やっぱり和宏は、男の名前を聞かなかった。

給料をもらった和宏は、近くにあつた安い定食屋に入った。

昨日からインスタントラーメンしか食べていなく、空腹も限界になつていた。

「いらつしゃい！」

古ぼけた店内では、朝から叔母さんの威勢のいい声が聞こえる。

店内は早い時間も混雑していて、肉体労働者の集まりから、ハムカツを肴に朝から飲んでいる年配の男達も見かけられる。

「何にします？」

少し黄ばんだグラスに、お冷やを持ってきた店員が尋ねる。

「あ…かけ蕎麦とカレーライス」

注文を済ますと、携帯電話をポケットから出して、裕輔のツイートを確認する。

家を出る前のツイートから、新しいツイートはされていない…

「俺からも、ちょっと送ってみるか…」

何と送ればよいのだろうか…と、迷いながら、和宏は初めてTwitterにつぶやいてみた。

《kazuhero 天国でも、飯は食うのか?》

和宏はまた、妙なツイートをする。  
すると、驚くほどはやく返信される。

《yusuke @kazuhero 食べるよ。。。みんなですूपやパンを食べるんだ》

「ずいぶんと洋食なんだな…」  
和宏はくだらない事を考える。

《yusuke @kazuhero コンテスト。急に学校行かなくて本当にゴメン。》

その言葉が送られてくると、一瞬、時間が止まった。

「かけ蕎麦とカレーライス、お待ちどおさま」

店員が注文した商品をテーブルに置くが、和宏は携帯電話に目が釘付けになり、全く気付いていない。

「お客さん!」

店員の呼び声に驚き、やっと我にかえる。

「ああ…すみません」

和宏はあわてて携帯電話をポケットにしまうと、食事をはじめた。裕輔のツイートには、その後、何と返せばよいのかわからなかった。

食事を済ませると、店を出て、自転車でフラフラと走っているうちに、来たことがない公園にたどり着く。自転車を止めると、目の前のベンチに腰をかけた。

『裕輔は、ずっと気にしていたんだ…』

今になって考えてみれば、もし、あの時に裕輔が辞退して晴海を加えようと考えていたら、登校拒否なんてあんな不器用な真似はせずに、同じトランプペットであった和宏くらいには申し出てくるはず…裕輔は決して賢いとは言えない人間であったから、単純に自分もコンテストに出たいけれど、晴海も出してあげたいと葛藤していただけではないだろうか…

そんな時に母親が再婚して、苗字も変わり、中学生の裕輔は物凄く苦しんでいたんだ…

そう考えているうちに、どうしても気が付いてやれなかったのかと悔やみ、和宏は涙が出てきた。

確かにあの時、晴海がメンバーに入っても、和宏自身がメンバーから外れるなんて心配は全くしていなかった。

だからといって裕輔を外そうなんて考えも無かったが、裕輔には『自分が外される』恐怖があったはずだ。

『きつとぼくを使ってくれないだろー』

チャーリー・ゴードンの言葉が頭で鳴り響いた。

周囲からも天才といわれ、期待されていた、当時の和宏に、そんな言葉は考えた事もない。

だけど周りはきつと、考えた事なんてない和宏を見破って、ずるがしこいと思っていたかも知れない。

やっぱり自分の事しか考えていない人間だと、思われていたのかもしれない…

そんな自分に、今更ながら腹をたてて涙が止まらなかった。

しばらく泣いて、泣きつかれた和宏は、携帯電話を手に取った。

《kazuhero あやまるべき人間は、僕です…》

そのつぶやきに、返信はなかった。

@3・きわたしかです

《yu^suke @kazuhero 今日も、とても好い天気  
みたいですね。。。》

翌日、ようやく届いた返信はこの言葉だった。

きつと、裕輔も返信の言葉に困ったのかもしれない…和宏は、このツイートを途切れさせたくなかったので、もう、自虐的な文章はやめようと思った。

《kazuhero @yu^suke 暑いよ、少しその雲で太陽を隠してくれ》

《yu^suke @kazuhero 今度やってみます》

和宏は、アルバイトにも行かずに、ただ家でゴロゴロとしていた。一昨日の派遣現場でうんざりした理由もあるが、そろそろ、この日暮の生活から抜けなければと考えていたこともある。

しかし、新しい職場での人間関係や、仕事がうまくできるのかなどと考えると、前へ一歩進むことができずにいた。

床に寝転がり、窓から見える空をボーッと見てみると、耳元で携帯電話が鳴る。

着信は重徳からだった。

「もしもし、和宏、ちょっと夕方時間あるか？」

重徳とは、JRの恵比寿駅で待ち合わせをした。

「どうした？連れて行きたい所ってどこだ」  
和宏が尋ねる。

「病院にお見舞いだよ。晴海先輩、入院してたんだ」

「入院って、どこか悪いにか？」

「なあに、先輩、旅行代理店に勤めて、仕事頑張ってたらしくて、それが過ぎて、ちよつとした過労だつて」

和宏は安心する。駅ビルの中で、見舞いの花や菓子を買い揃えろと、二人は駅から歩いて十分ほどの所にある病院へ向かった。

受付で晴海の病室を尋ね、病室を訪れる。

「久しぶりだから、ビックリするだろうな・・・」

大事にいたらない入院と聞いていた二人は、ニコニコしながら扉を開けた。

「先輩！」

「あれ！高山君に宗像君じゃない！どうして・・・」

突然の再会に、晴海は狐につままれたような顔をしている。

「ほら、先輩と同じクラスだった小山先輩。電車でバツタリあつて、入院してるって聞いたんですよ」

見舞いの花を差し出すと、晴海はうれしそうに匂いを嗅ぎ笑顔になる。

「何これ、ウォークマン…古いなあ、もう化石ですよ」

和宏は棚の上においてあったウォークマンを手にとり、勝手にイヤホンをあてて再生を押し。

「どんだけ古い歌聴いてるんですか」

和宏がからかうが、晴海はニコニコしている。

「これ…」

流れた曲は、アンサンブルコンテストで演奏した時の『空想・おもちゃ・夢』だった。

「どう、今聞いても、やっぱり泣きまねじゃない？」

晴海と目が合うと、その言葉にハツとした。

コンテストの都大会にむけて、五人で練習していた時の事だ。

裕輔の担当であった2ndトランペットが晴海に変わり、短い期間での練習であったが、都大会通過は間違いないだろうと言えるレベルまで、アンサンブルは仕上がっていた。

五分以内という制限時間の審査がある為、ある程度の小説をカットし、おかしくなっていないか確かめる為に、一曲通して演奏してみる。

「うん、このカットの仕方でおかしくないね」

重徳が皆に問いかけると、晴海だけ何か言いたそうに首をかしげた。

「晴海先輩、何か？」  
重徳は問いかけた。

「ううん、カットの場所に問題はないよ、大丈夫。ただ、えっと……  
こことか、ここも、宗像君、<sup>ピアノ</sup>pって書いてあるのに、その音量だと  
<sup>メソ・フォルテ</sup>mf位に聞こえるよ」

「先輩、ここは教室です。本番はホールでやります。本番と同じ音量で練習しなければ、ホールでは<sup>ピアノ</sup>ppにしか聞こえないですよ」

「理屈はわかるけど、それにしても……もっと感情的に演奏しないと」  
その時の和宏は、晴海の意見など全く聞こうとしなかった。言っている事が全くわからない、この人は音楽に向いていないんじゃないかと思っていた。

楽譜通りに演奏できるのは、当たり前。自分はそれ以上の技術の話をしてるのだと、考えを曲げない和宏に対して、晴海は少し感情的になって話した。

「宗像君、たしかにあなたの技術はすごいわ。私は口出せる域じゃない、そう……コンテスト用にできている。楽しいように、悲しいように、嬉しいように表現できているかもしれない。でも、自分が楽しい、悲しいって気持ちで演奏できてないんじゃない？それは泣きまねと一緒に」

しかし和宏は、何を言っているんだ、そんな器用に感情なんて動くわけないと頑固として聞かずに、自分の考えで大会にも臨んだ。  
結果、都大会も通過し、全国大会でも金賞を取ったことで、さらに自分の考えに確信がついた。

当時の演奏を聞いて、和宏はその事を思い出していた。その演奏に狂いはない、しっかりアンサンブルもできている。楽譜を思い出しても、その通りに演奏できているだろう。

だが、もしこの演奏を審査のない状態で聴いたら、確かにどうだろう…

その演奏に一瞬、笑顔が消えた。

「いやだなあ…先輩、からかって。俺まで頭痛くなって入院ですか？」

「隣のベット、空いてるみたいよ」

晴海の笑顔に、その場も和やかになり、三人は思い出話などをしばらく話した。

「先輩、いつまで入院なんですか？」

和宏が尋ねる。

「うーん、どうだろ…だけど、先生とお母さんが、働きすぎだったからいい機会だし、しばらく入院して休みなさいだって」

「そうなんですか…でも、その方がいいかもしれませんね」

「退屈だから、早く退院したいんだけどね」

気づいたら外は暗くなっていたので、和宏と重徳は病室を後にした。

「また来ますね」

「ありがとう…待ってる」

病院を出た二人は駅に向かい歩く。

「なあ、折角だから一杯だけやっていかないか？奢るからさ」  
重徳の誘いに、二人は駅近くの居酒屋に入った。

一本の瓶ビールを注ぎあい、二人は乾杯をする。

「もっと高い所、奢ってもらえばよかったかな」  
和宏は、からかって冗談を言う。

「晴海先輩、入院してるのに元気そうって言うのもおかしいけど…  
でも、なによりでよかったな。」

「ああ…ハツとしたよ、あの演奏聴いてる時『今でも、泣きまねじやない？』って聞かれた時は」

和宏の話に、重徳は持っていたグラスの手が止まる。

「なあ…俺たち、何で全国大会で金賞を取れたと思う？」

「何でって…そりゃあ、中学生にしては、技術もあつたし、練習もしたからな」

和宏は、質問の戸惑う。

「じゃあ、晴海先輩が感情的になって、練習と同じ用に演奏したらどうなった」

「練習と同じようにやってたら、そりゃあ、もう、あ…」

「そつだ、気づいたか。あれは、晴海先輩が、おまえの考えに合わせたんだよ。1stトランペットを潰さないように、そして自分は代行だつて思つてて、あの人が、俺たちのアンサンブルに合わせたから金賞だつたんだ。自分の感性と違う音楽に合わせたんだ」

和宏は、また今更気がついた。自分は晴海の考えを取り入れようとしなかった。たぶん、他の三人も、そんな和宏の姿を見て、言つても無駄だと思つていたんだ。

だから周りも合わせた。アンサンブルも成り立った。アンサンブルじゃない…一人の男のエゴが成り立ったんだ。

「なあ、気を悪くするなよ、おまえは正しかったんだ。だから金賞だった。おまえの表現する技術が正しかったんだ。ただ、技術はあったけど、心は少し硬すぎた」

「知識の向上と心のバランスが合っていない…つてやつか…」

和宏はグラスのビールを飲み干した。気を悪くなんてしていない、自分は愚かだったと反省していたのだ。

店を出ると、二人は駅で別れた。和宏は電車に乗らずに、そのまま夜道をフラフラと歩いた。

坂を上り、橋を渡った所で花壇に腰掛け一休みする。そして裕輔にツイートを送った。

《kazuhero 今日はやられたよ。。。》

裕輔からの返信が来る。

《yu^suke @kazuhero どうした?》

《kazuhero @yu^suke 音楽に向いていなかったのは、俺だった》

自虐的な言葉は送らないと決めていたのに、つい、送ってしまう。今度はちゃんと、返信が来た。

《yu^suke @kazuhero 僕は好きだったよ、和宏のトランペット。。》

あこがれてた、また聞きたいなあ。。。。》

《kazuhero @yu^suke ごめんよ…しばらく吹いていないから

そこまでは音がとどかない(笑)。。。。》

《yu^suke @kazuhero おもしろいね。。。。》

何だか元気が出てきた和宏は、立ち上がり再び駅に向かい歩き始めた。

翌日、和宏は再び病院を訪れた。昨日、一晩考えて、やはり晴海にきちんと謝りたいと思ったからだ。

今日は、晴海が中学生の時好きだった、バームクーヘンを手土産にする。

「やあ、来てくれるのは嬉しいけど、どうしたの?」

「いや、ただ、昨日はこれを持ってくればよかったなあ…と  
思ってバームクーヘンを見せる。」

「うわぁ！私が好きだって、よく覚えてたね。嬉しい！ありがとう  
まるで子供のように、目をキラキラさせてバームクーヘンを受け  
取る。」

「先輩、失礼ですけど、結婚は？」

「うっん？彼氏も募集中。立候補する？」

「僕は…甲斐性がないですから」

晴海は笑うと、早速開けたバームクーヘンの一かけらを和宏に渡  
す。

「あの…アンサンブル…上手く言えないけど、やっと気がついたか  
ら…俺の考えに合わせてくれてた事も、先輩がいつてた『泣きまね』  
の意味も…だから、謝りたかったんです。あと、お礼も…」

晴海はニコツと笑うと、手に持っていたバームクーヘンを見つめ  
ながら話す。

「謝らなくていいよ、楽しかったし。私は、皆と、皆の考える音楽  
がしたかっただけ。私の考える音楽は、私であるかぎり、いつでも  
できるから…」

その言葉を聞くと、立ちっぱなしだった和宏は、椅子を自分に引  
いて腰をかけた。

「あ…先輩には話そうかな…」

「何を？」

和宏は思い出したと『ポン！』と両手を叩いた。

「笑いません？」

「笑わないよ」

「怖がりませんか？」

「だから、何？」

「最近やってるんです、ツイッターっていつの…しかも裕輔と」

「裕輔って、早川…あ、菊池君？」

「そうなんです…あれ、おかしいと思ってます？」

晴海はニコツと笑いながら話した。

「全然。だって、本当なんですよ？」

その言葉を聞いて安心した和宏は、嬉しくなり更に話を続けた。

「その事は、僕も不思議なんですけど、それ以上に嬉しいんです。いっぱい話したいことがあって…でも、いっぺんに色々話しちゃうともったいないから、少しずつでいいんだけど、毎日話したくて…初めは誰かのイタズラだと思ってたけど、今は本当に裕輔だって信じれるんです」

「そうなの…」晴海は、その話を嬉しそうに聞いている。

「私もフォローしてくればよかったのにな」

「先輩からやってみましようよ！誰でもできるみたいだから」

「そんな、二人の邪魔はできません」

二人はニコニコと笑いながら、話を続けた。

もし、僕がこの話を聞く立場だったら、きつと笑って信じないだろう。本当は皆に言いふらしたいくらいに嬉しい事だけど、きつと信用されないと理解できてしまう事が悔しいくらいだ。

チャーリーだったら、かまわず皆に話して、皆が笑っているのを喜んでいると思ってしまうかもしれない。あの本の言う通りだ…賢いというのは、時々残酷なのかもしれない。

そんな事を考えながら、和宏はまるで、自分がチャーリー・ゴードンにでもなったかのように、何も考えずに話をした。

その話を晴海はニコニコと聞いていた。

「話すぎちゃった、帰らないと…聞いてくれてありがとうと…ございました」

「いいえ、こちらこそ」

和宏は嬉しそうな顔で、椅子から立ち上がる。

「あ…また来たら迷惑ですか？」チラツと晴海の顔色を伺う。

「とんでもない、次の話、楽しみにしてる」

その言葉を聞くと、軽く頭を下げて笑顔で病室を後にした。

《kazuhero けえかほおこく こんなに気持ちがいい気分なのは

ひさしぶりだ。。。》

《yusuke @kazuhero どうしたの？いいことでもあった？》

《kazuhero @yusuke あのカタブツが、俺の頭からいなくなつて

こんなにスッキリしているのは初めてだよ》

《yusuke @kazuhero そうなのかい。。。和宏がうれしいと

僕もうれしいよ。。。》

《kazuhero @yusuke ああ。。。今日の俺は、自分が自分じゃないみたいだ》

病院を出た和宏は、まるで人が変わったように、鼻歌なんか歌いながら道を歩いていた。

『今日だけは、誰かが見ているなんて気にすることないさ。こんなに気分がいいんだ。そうだ、あそのコンビニで弁当を買って、あその公園のベンチに座って食べよう。きっと日が暖かくて気持ちがいいはずなのに、見られていたら恥ずかしいと思つてやらなかつたんだ。こんなに簡単に手に入るのに』

本当ならば子供が考えそうな事でも、幼い頃の和宏は、賢かったから考えもしなかった。だから、今日は全ての物が新鮮に見えて、色々なしがらみから開放された気分であった。

《kazuhero あのカタブツが少しだけでもどつてきたみたいだ。。。》

翌日、アルバイトにも行かずに日々を過ごす和宏は、少し不安になっっていた…

財布を開くと、残金もわずかな事に気がつく。

こうなれば、何か売れる物でもないかと部屋の中を探しているとクローゼットの奥からトランペットが出てきた。

ケースを開けると、トランペットは綺麗なままで眠っている。ピストンを押してみると、さすがに少しかたい。

少しためらったが、背に腹は変えられないと考えトランペットを売ろうと思うが、このままでは酷いと、クロスやピストンオイルを取り出し、手入れを始めた。

手入れの済んだトランペットをケースにしまうと、楽器店に行こうと家を出る。

道があるきながら、ふと、裕輔からのツイートを思い出した。

《yusuke @kazuhero 僕は好きだったよ、和宏のトランペット。。》

あこがれてた、また聞きたいなあ。。。》

その言葉がひっきり、なんだかトランペットを売ることがとても悪い事に思えてくる。

せめて、最後までいいは吹いてみるかと、自宅に自転車を取りに戻

って、離れたところにある河原へ向かった。

河原の人影が少ない場所で、マウスピースを口にあてると『ブーッ』と音を出し、口ならしをする。

久しぶりの感触に初めは違和感があったが、それはすぐになれてマウスピースをトランペットに付けた。

唇を振動させ、息を吹き込めば、昔のようにいなくても、音くらはちやんと出る。

手慣らしに音階を繰り返してみると、やはりブランクは当たり前で、高い音などが思うように出ずに、すぐに疲れてしまう。そして試しに『空想・おもちゃ・夢』のフレーズを吹いてみるが、全くというほど、吹けなかった。

《kazuhero けえかほおこく やっぱりトランペットは  
全く吹けませんでした。。。》

《yusuke @kazuhero 聞こえてましたよ。。。  
でももつとはつきり

聞きたいので、大きな音が出るように練習お願いいたします。》

やっぱりトランペットは手放す事ができなかった。

トランペットを手放したくないと思うよりも、そうしたら裕輔とも切れてしまう気がしたからだ。

そして、晴海に教わった『泣きまね』ではなく、感情のある音楽もやってみたいと思った。

『今の俺は、前に進む力がないくせに、前に進むことしか考えてない。きつとこのままでは、ただ、もがき苦しんで、気がつけば何も進んでないのだろう』

《kazuhero @yusuke 昔を思い出しながら、も  
う少しだけ

頑張ってみます。。。》

#### @4・とてもわるいこと

《kazuhuro @yusuke 最近は毎日が充実してきました。》

《yusuke @kazuhiro そうですか、それはとてもよいですね。。。》

「それで先輩、裕輔が言うんですよ……」

裕輔の話をしてからというもの、和宏は毎日のように晴海の病院を訪れた。

普通であれば、笑われてしまうような話でも、晴海はニコニコと笑いながら聞いてくれるので、和宏にとっては、とてもよい話し相手だった。

「いけない、行かないと…仕事に遅れる。また、明日来ますね」

和宏は以前勤めていた運送会社に連絡をとり、配送センターの方で倉庫管理をすることになった。

家電量販店などで購入された商品を各家庭に配送するために、エリア事に仕分けたり、引き取られた電化製品をリサイクルセンターに送るように手配する仕事である。

入ったばかりの和宏は、引き取られてきた製品を種類ごとに仕分けたり、その時に出た廃棄物などをひたすら収集車に運ぶなどと、肉体労働に汗を流していた。

肉体労働と言っても、引越し作業の時のように、やぶからに罵声

をとばす人間もないし、非常に働きやすい環境であった為、ストレスなどを感じる事もなく仕事ができた。

出勤時間も午後からであった為、午前中に病院を訪ねてもゆつくりと出勤できて、今の和宏の生活には最適であったのだ。

二十一時まで仕事で汗を流すと、帰りは缶ビールを片手に家路を歩く。

《kazuhirō 今日仕事が終わりました…つかれた。》

最近になって気がついた事は、二十一時以降はツイトしても、返信は翌日である事。

「さすがに天国でも、夜は寝るのか」と和宏は可笑しくなる。

だから、この時間は一日の出来事を報告しようと思い、ただの日記のように一方的につぶやいていた。

《kazuhirō けえかほおこく 晴海先輩は今日もニコニコと笑ってました。

だから俺まで笑顔になれて、まるで魔法のようだ。。。》

《kazuhirō きつと中学の時からそうだったはず。。。もっと早くに

気がついていればなあ。。。》

翌日、今日は仕事が休みだった。

《yusuke @kazuhirō いつもかわらずに笑顔でしたよ。。。》

和宏は午後から病院を訪れた。毎回来るたびに手土産を持ってこられても気が引けると言われたので、今日は写真を一枚だけ持ってきた。

アンサンブルコンテストの全国大会で、授賞式後に五人で撮った写真だ。

病室を訪ねると、ベッドは綺麗にシーツが変えられて、晴海の姿はなかった。

「あの…ここにいた女性はどうしましたか？」

向かいのベッドにいた女性に尋ねる。

「ああ病室が変わるって言ってましたよ」

受付に戻り晴海の新しい病室を尋ねる。晴海は四人部屋から、個室に移っていた。

「先輩」和宏が呼ぶと、またニコニコと晴海は笑っている。

「ビックリしちゃいましたよ、部屋に行ったらベッドが綺麗に片付けられてるから。まさか…なんて」

「ハハハ、驚かしちゃってごめんね」

「でも、何で個室に？もう、しばらく入院しているし、退院でもおかしくないのに…やっぱり、どこか悪いんですか？」

「うーん、まあ、元々体は弱いから、検査もかねて、もうしばらく入院してた方がいいってただだよ」

「そうなんですか…」

いつも笑っているだけで病気のようにには全く見えないけれども、だだの過労がこんなに長引くものなのかと、和宏は不安だった。

「そうだ、これ見せようと思って」

和宏は鞆から写真を取り出す。

「これは…何？」

「いやだなあ、全国大会の時に、授賞式終わってから、皆で撮ったじゃないですか」

「ああ…そうだよな、うわあ！懐かしいなあ…」

晴海は真剣な顔をして写真を見ていたが、どこか笑顔ではない。

「あれ…もしかして、本当は嫌な思い出だったりします？やっぱり俺のせいだ…」

晴海は急に我にかえり、またいつものようにニコニコと笑い出す。

「まさか！ねえ、この写真、もらって…うつん、退院するまで借りていてもいい？」

「もちろん、いいですよ。ああ…じゃあ、明日は、この写真を入れる写真立てを買ってきましょう。それで買ってくるのは最後にしますから。どんなのがいいかなあ…木彫りもいいけど、硝子でできているのも綺麗だ…」

そんな事をしばらく話し、和宏は病室を後にした。

病室を出ると、その足で晴海の担当医である、相澤亨の所を訪ねた。

晴海は何かを隠している様子だが、普通に考えれば、ただの過労で入院しているのではない事くらい分かる。守秘義務もあるだろうから、教えてはくれないかもしれないが、どうしても真実が知りたかった。

和宏は、相澤の部屋の前で、一度深く深呼吸してからドアをノックする。

「どうぞ」声が聞こえたので扉を空けると、相澤は真剣な顔でパソコンを打っていた。

「ああ、あなたは確か尾崎さんの病室によく来ている…」

「はい、宗像和宏と言います」

「どうしました？まあ座って」

椅子に腰をかけると、和宏は真剣な顔で尋ねる。

「あの、教えていただけないかもしれませんが、彼女、本当は何で入院しているんですか？過労じゃないですよね、どうしても知りたいんです」

相澤は和宏とめが合うと、一度大きくため息をつく。

「本人も知っているし、いずれは分かってしまう事だからね…」相澤が話す。

「アルツハイマー型若年性認知症ですよ」

「認知症…だって、彼女はまだ、そんな年齢じゃないでしょ？」

「年齢は関係ないですよ、現在の高齢化社会に伴い高齢者のアルツハイマー病が増えたことで高齢者の病と思われがちですが、元々は若い頃から脳に病変が起きてしまう若年性の病気なんです」

「なんで…なんでそんな…じゃあ、始めから過労ではなかったんですね…」

「はじめは過労…いや、仕事でのストレスや過労から来る鬱病の傾向だと思っていましたが、この病気は、もの忘れなどの軽い症状から始まるから、ほら、過労で寝不足だと物忘れとかは、正常な人でもありがちじゃないですか、でも入院生活の中で違いがはっきりとしてきたんです」

「違いとは…」

「彼女、いつもニコニコと笑っているでしょ？鬱病患者さんはあんな表情しないですよ、しかし認知症の方は、普段の生活だと、あやうって穏やかな場合が多いんです」

和宏には理解できない話であった、いつも穏やかに、あんなにニコニコと笑っていた晴海の笑顔…自分は魔法のように幸せな笑顔だと感じていたのに、医者はそれで病気が分かってしまうのか…その現実を受け止めるのは苦しかった。

「治るんですか？治るんですよね、手術とかで」

「脳血管性若年性認知症であれば、外科的手術や薬物療法、運動療法といった治療で、ほとんどが改善できますが、アルツハイマー型若年性認知症の場合は、進行を遅らせることはできても、残念ながら『治す』という事はできないんです。治すどころか、最近になって『プレセニリン』という危険因子が大きく関与しているのではないかとことまでは分かってきているが、原因すらはっきりは解明されていないんですよ」

和宏は、あふれそうな涙をこらえて相澤と話す。

「彼女は…彼女は、どうなるんですか…」

「症状は人それぞれなので、何ともいえません…始めは物忘れが多かったり、覚えが悪くなったり、コミュニケーション障害や、幼稚化してしまう人もいますが、後期になると行動障害は少なくなるが、痙攣発作がおこったり、食事や歩行も困難になり失外套症候群（寝たきり）の状態になってしまいます」

《kazuhirō けえかほおこく とても悪いことがありました。》

絶望の意味がわかりました。。。》

話を終えた和宏が病院を出ようと歩いていると、花束を持った重徳とバッタリ会った。

「よう、和宏。俺も今から、晴海先輩の所に行こうと思ってたんだ」

和宏はショックのあまり言葉が出ない。

「どうした…何かあったのか？」

二人は病院の近くにある喫茶店に入ると、相澤との話を重徳に話した。

「晴海先輩が…嘘だろ…」

突然の話に、重徳も驚きを隠せない。

「本当らしい…言われてみれば、今日、皆で撮った写真を見せた時、なんだか忘れてしまっている様子だったよ」

重徳だってショックは大きい。しかし、それよりも下をうつむいたまま暗い顔をしている和宏には何と話しかけてよいのかと困った。

「おまえ、絶対に晴海先輩の前でそんな顔するなよ…辛いのは本人のはずなんだから」

「わかってるよ…」

「なあ和宏、ジュンちゃんと話してた『アルジーノン』おまえ、長編に改定された小説しか読んでないだろ…」

「えっ…」急な質問に和宏は驚く。

「俺はどうも苦手だったんだ、長くて、ひらがなばっかりで読みにくくて、途中までしか読めなかったけど、なによりチャリーイの生き様が卑屈的に書かれているようで…だから、俺はドラマで見ただけなんだよ。ドラマのチャリーイは前向きで、周りに応援してくれる人たちがいて、笑顔だった」

重徳が何を言いたいのだから、和宏は理解できていない。それは、今話すことなのかとすら思う。

「何が言いたいんだ？」

「つまり、おまえは物事を卑屈にとらえすぎだし、それで自分も卑屈になってるだろ、そうしたら晴海先輩はどう思う？小説のチャリイと一緒に。心により所がなくなる。そりゃあ、この事は俺だつてシヨックさ、だけど俺たちが前向きに考えないと、本人はもつと前向きになれないよ」

二人は喫茶店を出ると、重徳は晴海の見舞いに向かった。和宏はもう一度会えるゆとりなどなく、その場を後にした。

歩きながら、重徳が話す意味を考えた。確かに和宏がどんなに落ち込んででも解決する問題ではない。それどころか、本人を余計に不安にさせてしまう事は分かっている。

歩きながら、一件のアンティークショップが目にとまった。

「そつだ、写真立てを買おう」

普段あまり立ち寄ることの少ない店内の雰囲気であり、色々な物に目移りしてしまう。

どんな物が良いか、どんな物が喜ぶのかを考え、和宏はラバーウッドのフレームで出来た写真立てを購入した。

たとえどんな理由であろうが、ただ、晴海には笑顔でいてほしかった。

《y u ^ s u k e @ k a z u h i r o 元気なかつたみたいだけど。。。大丈夫？》

《kazuhuro @yusuke 晴海先輩の病気を聞いてシヨックでしたが

俺が落ち込んでも、彼女に迷惑だろうと考えました。。。今日買った写真立ては気に入ってくれるだろうか。。。》

《yusuke @kazuhiro きっとよろこんでくれますよ。。。》

そして翌日、和宏は仕事の前に病院を訪れた。

「先輩、写真立て買ってきましたよ」

「うわぁ！嬉しい。ありがとう」

晴海は昨日の写真の額に入れると、それを見ながらニコニコと笑っている。

「よかった…喜んでもらえて」

写真立てを棚に置くと、晴海はニコニコたまま話す。

「ねえ、宗像君、毎日仕事の前に来るの大変でしょ？嬉しいけど、もう来てもらわなくていいよ」

「何を言ってるんですか、全然大変じゃないし、俺が好きで来ているだけだから大丈夫ですよ」

すると、さっきまでニコニコしていた晴海の顔が、急に真剣にな

った。

「知ってるんでしょ…私の病気…」

その言葉に、和宏は黙ってしまふ。

「だから、私が来てほしくないの…今は、こうやって話せているよ。けど、どんどん私じゃないみたいになって行くはずなの、今だって、昔の事はどんどん忘れていつてる…そのうちに宗像君と音楽をやっていた事も忘れて、どんどん馬鹿みたいになって行くはず…そんな姿は見られたくないの」

晴海は興奮して話しているうちに、ボロボロと泣き始めた。

そんな姿を見て、和宏は優しく肩をたたく。

「忘れる？絶対に忘れさせませんよ、せめて俺たちの事は…忘れてら、また覚えてもらいます。それでもまた忘れたら、また覚えてもらいます。顔まで忘れられると困るから、俺はまた来ますよ」

泣き止まぬ晴海を抱き寄せると、和宏も涙をこらえていのが見られぬように、晴海の髪に顔を寄せて隠した…

病室を出た和宏は、相澤を訪ねる。病気の事を理解し、治る方法が無くても、進行を遅らすことができるのであれば、その知識を自分も得たいと思っていた。

「先生、薬で進行を遅らす事ができるのは、昨日聞きました。そのほかにも進行を遅らせる方法はないのでしょうか」和宏が尋ねる。

「あとは、回想法や音楽療法などのリハビリ的な療法もありますね」

「音楽療法？」

その言葉に和宏が食いつく。

「例えるなら、こんな例があります…ある病院で、軽度の認知症を伴ったアルツハイマー型認知症の患者10名を対象として、小グループによる活動的音楽療法を1回60分、週2回のペースで6ヶ月間施行した。音楽療法終了後、異なった複数の評価方法を用いて効果の判定をした。音楽療法士による評価および高次大脳機能検査では、それぞれ半数以上の症例に改善効果を認め、お互いの判定結果には有意の相関性がみられた、ヘッドホンを介しての音楽刺激によるデジタル脳波記録では、症例個々の好みの音楽に対する反応性が良く、同時に好きな音楽を聴くことにより、リズムの速波化が認められた」

「小グループによる活動的音楽療法…」和宏は、ふと、ある事を思いついた。

《kazuhiko けえかほおこく 今日、ちょっとだけ良いことがありました。》

夜、仕事を終えた和宏は重徳に連絡をとり、今日、相澤から聞いた音楽治療の話をする。そこで、週

二日、一時間だけでも晴海を加えてアンサンブルをやったらどうかと提案すると、重徳もその話には賛成をした。

「週二日ならば、土、日曜日で大丈夫だ。俺の入っているアマチュアバンドの練習室を一部貸してもらえばいい。陽子や淳一郎も誘っ

てみよう、そうすれば、陽子の学校の体育館なんかも貸してもらえるかもしれないし、その気になれば河原でだって演奏はできるんだ」

重徳の言葉は、とても頼もしく、とても心強かった。

「だけど、和宏はしばらく演奏していないだろ…大丈夫なのか？」

「その気になれば、河原でも練習はできるぞ」

《y u ^ s u k e @ k a z u h i r o  どんなよいことがあったのですか？》

《k a z u h i r o @ y u ^ s u k e  はい。とても素晴らしい事です。。》

けいかは後でほうこくします。。。》

翌日、和宏はアンサンブルの件を相澤に話すと、その事に関しては賛成してくれた。

「今の状態であれば、まだ外出も可能でしょう。もう少し進行してしまつと外出なども難しくなってしまうますが、あとは…」

「あとは…何ですか？」

「昨日話した例でも、最低半年の例です。つまり、長期的な治療になるんですよ、彼女の病気の進行具合によっては、一緒にいることすら大変になってくるし、休みの日を利用してと言っても、あなたたち自身にも生活がある。もし、途中で投げ出す事があれば、一番

傷つくのは彼女本人ですからね」

「大丈夫です、継続します」

和宏は相澤の部屋を後にすると、晴海の病室へ向かった。

部屋では晴海が笑顔で写真立てを眺めている。

「先輩、今日のおみやげです」

ポケットからカセットテープを取り出すと、棚に置いてあるウォークマンに差し込んだ。

「聞いてみて下さい」

イヤホンを耳に付け、再生すると、トランペットの演奏が流れた。

「これ…えっと…『ロンドンデリーの歌』の…」

「そう、『ダニーボーイ』です。覚えてますか？僕が入部した時に、先輩が一番初めに教えてくれた曲ですよ…」

「そうだったっけ…逆によく覚えてたね」

「それ、今朝、俺が吹いたの録音したんです。だから、全然下手でしょ。これから毎朝、一時間だけ練習することにしました。経過報告として毎日録音するので、また俺に指導して下さい」

「この演奏だったら、何処がダメかは自分でも分かるでしょ」

晴海は笑いながら話すと、その演奏を目を閉じて、ニコニコしな

がら聴いていた。

「何で練習はじめたかというのと、俺達、またアンサンブルやるって話になったんです。あ、もちろん趣味ですけどね」

「本当！」驚く晴海。

「はい、だから週末に集まるので、先輩も参加しましょう」

「でも私は入院しているし、いつまで、こうしていられるのかも分からないから…」

「大丈夫ですよ、できなければ聴いているだけでいいのだし、さっき、そこで相澤先生に会った時に話したら、外出しても大丈夫って言ってました。それに、今の俺よりは、先輩の方が全然上手いはずですから」

晴海はその言葉を聞くと、嬉しそうにならずいた。

《kazuhirō けえかほおこく 良いこととは、皆での演奏を裕輔にまた聞かせることができそうです。。。》

《yusuke @kazuhirō それはとても楽しみです。。。》

「こちらもとてもいいことがありました。。。》



@5・たいせつなじかん

晴海の音楽療法が始まった。

陽子や淳一郎も、事情を話すと快く賛成してくれた。

週末の土曜日、一度、病院に集まると、重徳の車に楽器を積み込む。

「皆さん、宜しくお願いいたします」

病院に来ていた晴海の母、佳子が頭を下げる。

「心配しないで下さい、何かあれば連絡いたしますので」

挨拶をすますと、五人は車に乗り移動した。

「重徳、バンドの練習場、使わせてもらって大丈夫なのか？」和宏が話す。

「いつも週末の午後から練習があるから、午前中の時間なら大丈夫なんだけど、今日は折角だし、練習も休んだから、空気のきれいな所に行って練習をしよう。途中で買い物でもして、練習の後、河原でバーベキューでもやってさ」

「賛成！練習もだけど、今日はおもいつきり遊ぼうよ！」

五人の中で一番はしゃぐ陽子。晴海は皆の会話を聞いて、ただニコニコと笑っている。

音楽療法の為とえば、晴海が気を使って参加しないのとは思いい、あくまで自分達の趣味の一環で行う事という体裁になっている

が、それもまんざら嘘ではない。

「先輩、車酔いとかしたら言って下さいよ」

「うん、ありがとう」

和宏はほかの連中と比べて、大人しく、気を使っている晴海のことを気づかう。

「何、何？いつの間に二人、いい感じになっちゃってるの？和宏らしくない事いっちゃって」

陽子がちやかすが、和宏は、本当に余計なことばかり言う女だなあと思い、陽子を睨みつける。

「おまえさあ、本当に生徒とかにも、そういう態度じゃないだろうな…中学生なんて思春期だから、すぐに嫌われるぞ」

「余計なお世話、和宏の中学生の時みたいに生意気な子供はいません」

話をしながら、車は都会を抜けて、だんだんと緑の多い道なりと変わってゆく。

途中のスーパーで買い物ですますと、山道を潜り、川のほとりに車を止めた。

「ここなら空気もいいし、演奏しても迷惑にならないから大丈夫だろっ」

車から降りた重徳が、手を広げ、空気をいっぱい吸い込む。

「よし！じゃあバーベキューの準備しよう！」

「アホか、先に練習するに決まってるだろ」

完全に目的を突き違える陽子を、和宏は注意する。

陽子は少し不貞腐れていたが、五人は車から楽器を積み下ろし、各々でウォーミングアップを始めた。

「先輩、相変わらずそのトランペット使ってたんですか？」

中学時代から変わらぬ楽器を使っている晴海に和宏が驚く。

「大学でも吹奏楽やってて、卒業してからも、しばらくアマチュアバンドに入ってたけど、ずっとこの楽器一本だよ。大切に使えば一生使えるからね」

ピストンを無造作に押しながら嬉しそうに話す晴海。

「和宏、おまえの方は仕上がってるんだろっな」

淳一郎が問いかける。

「まあ、なんとなくは取り戻してきたけど、まだまだだな……」

「よし、じゃあ皆で合わせるか。曲は…そうだな、久々に五人で合わせるから音あわせ程度から『パツヘルベルのカノン』にしよう」

五人の奏でる、カノンのハーモニーが、澄み切った空気の中、空に広がる。

和宏もブランクを取り戻す為に、朝一時間だけの練習だったが、音程や技術は感覚を取り戻していた。

「ねえ、折角五人が集まったんだから、久々にやろうよ」空想、おもちゃ、夢』」

すっかり、いい気分になった陽子が有頂天になり話す。

「あせるなよ、やみくもに好きな曲を何曲も吹くだけじゃなくて、一曲、一曲をしっかりと仕上げている」

重徳がリーダーシップを執り、再び、バッヘルベルのカノンの演奏が続いた。

合奏時間は、音楽療法の事例の通り、一日60分にすることにした。

楽器をしまうと、重徳があらかじめ準備をしてきたコンロなどを用意して、バーベキューを楽しんだ。

思い出話などがはずみ、五人は楽しい一時を過ごす。晴海も変わらず笑顔で話している。

食事を終えて、和宏が一人、川をボーツと眺めていると、晴海が寄ってきて話をした。

「なんか、入院する前から考えても、こんなに遊んだの久しぶりな気がする。楽しいね」

笑顔で話す晴海の姿は、和宏にとって何よりも癒される。

「私ね、正直に言うと、最近は怖くて眠れない日が続くの。楽しかった思い出も、今こうして創っている思い出も、みんな忘れちゃったのかと思うと怖くて…そうやっていくのも怖いけど、まだ覚えている今が一番辛い…こんな時間が続くのなら、いつそ早く忘れちゃえばいいのって思う時もあるの」

寂しそうな表情で話す晴海。その姿を見ているのは、たまらなく辛い。

「忘れさせませんよ…前も言ったとおり、忘れちゃったとしても、また覚えてもらいます。覚えられないのであれば、それは努力してもらおうし、思い出だつて…そう、失ってしまった分は、こうして新しく創つていけばいいじゃないですか…」

口下手な和宏が、今、精一杯かけられる言葉だった。その言葉を聞いて、晴海は嬉しそうな顔で和宏を見つめる。

「いつも本当にありがとう…感謝しています…」

その言葉に和宏は笑顔を返すが、本当の気持ちは辛くてたまらなかつた。

「何、何？また二人でイチャイチャと！和宏も、いい大人がじれったい事してないで、好きなら好きってさっさと言っちゃいなさいよ！」

「うるさいな！オマエは！」

また無神経に話しに割り込む陽子に、和宏は川の水をかける。

「あいつが教師をやってるって事が、どうも俺には不思議でたまらん」

「実際は、親からクレームだらけなんじゃないか？」

重徳と淳一郎は、その姿を離れた所から見て、笑っていた。

《kazuhiro 今日の演奏は、裕輔に聞こえたかなあ。。。》

《y u ^ s u k e @ k a z u h i r o ちゃんと聞こえてましたよ。。とても感動しました

もっと、いろんな曲がきけるのを楽しみにしています。。。》

自宅に帰ると、和宏は一冊のノートを広げた。

それは、相澤に頼まれた、晴海の『経過報告』だ。

音楽療法としての経過を記録して、医師である目線の相澤と共有するために頼まれた物である。

文章は難しく考えずに、日記のような形式で書けばよいから、晴海の表情や言動を、見たまま、感じたままに書くように言われていた。

### 『経過報告』

今日の彼女は、僕の見ただ感じでは、いつもと変わらぬ彼女だった。どこまでが普通で、どこまでが病気が原因なのかは、正直、僕には判断できない。

だから、言われたとおりに、ありにまますべてを記して、その判断は相澤先生に託したいと思う。

楽器の演奏や、周りとの協調性は問題なく感じられる。チューニングの時や、演奏中なども周りと同様に音程もとれていて、合奏としては問題はない。当たり前かもしれないが、中学時代よりも技術は上がっていた。

楽譜などを読む事にも抵抗はなさそうであり、表現表記などを質問してくる事があるが、日常から音楽と接していなければ、誰もがある物忘れに感じる。むしろ、忘れていく事が多いのは僕の方だ（笑）

思い出話などをしている時、彼女は基本、皆の話を楽しそうに聞いているだけだし、以前、写真を見せた時もそうだが、忘れてしまっている、気を使って話しを合わせる所はあるから、正直見えづらい。

アルツハイマー型若年性認知症に対する、僕の独学での勝手な意見だが、もし話しを合わせているとしても、話しを合わせたり、ごまかしたりできるだけ良いのかとも捉えている。

ただ、今後進行してゆく病気に対して、恐怖から睡眠がとれていない様子です。何か良い方法があれば  
お願い致します。

重徳、淳一郎、陽子とは、事前に打ち合わせていた事があり、その内容は

- ・音楽療法をして、新しい曲に取り組むよりも、学生時代に演奏した曲を中心に演奏する。
- ・回想法として思い出話をたくさんする。

この二点を考えて晴海と接しているが、今の時点では会話などに抵抗は感じられない。

相澤の話であれば、思い出したり、忘れたりする事も多いとは言っていたが、晴海が本や、インターネットで調べた事と同じ状態になるとは、和宏には想像がつかなかった。

翌日は、重徳が所属するバンドの練習室を借りて演奏をした。

今日は、淳一郎が楽譜を持ち出して、自分達が中学時代に流行した歌謡曲などの演奏をして遊んだ。

当時のテレビドラマの主題歌になった曲などを演奏しながら、どんな内容だったか、役者は誰が出ていたかなどを話すが、これは五人ともあやふやな意見が多かったので参考にならず。

ちなみに、一番内容を忘れていたのは陽子でした。悪い冗談で申し訳ないですが、相澤先生、彼女の検査もお願い致します。

重徳が所属するバンドから、一カ月後に行われる地元の祭りのイベントで演奏をするので、参加してみないかと誘いを受けました。彼女に関する事情は重徳から説明してあり、こちら側の判断で大丈夫と言ってくれていますが、相澤先生としてはいかがでしょうか？僕には予測できませんが、それなりの人数の前で演奏するので、プレッシャーなどがかかる事だけ不安です。判断をお願い致します。

練習を終えた後、重徳と淳一郎は、後の予定があった為に別れたが、和宏と陽子は、晴海を病室まで送り、帰りに相澤を訪ねた。

合い間を見て書き上げた経過報告を相澤に渡す。

「ちょっと！私が検査必要ってどういう事よ！」

病院内で大きな声を出す陽子に、相澤が『シート』と指を立てて合図をする。

「でもね、現実として尾崎さんが罹ってしまっている病気だから、あなた達も気をつけた方がいいことは事実ですよ」

相澤の言葉が、二人に重く響く。

「一カ月後であれば、今の状態が継続できれば問題ないでしょう。」

私も時間がつくれば観客として見に行こう。見てみたいしね。本当に、彼女に対する君たちの努力には頭が下がりますよ」

その言葉を聞いて、二人は顔を合わせ笑顔になる。

「但し、明日からも続く脳検査や、テストで厳しいと判断された時には、残念だが支持に従ってほしい。

これは、これからの彼女の生活全般に言える事です」

《kazuhirou ニュースです。演奏会に参加することになりました。》

晴海先輩もです。。。とても楽しみだ。》

《yusuke @kazuhirou 本当ですか！今から楽しみです。》

帰り道、和宏と陽子は食事も兼ねて居酒屋に立ち寄った。

「俺、ある程度、資金ができれば、病院の近くに引越して来ようと思ってるんだ」

めずらしく和宏の方から真剣な顔をして相談を持ちかける。

「何、本当に晴海先輩の事、好きになっちゃったの？」

照れている事もあり、その質問には答えない。

「私は反対だな」陽子も珍しく真面目な顔で答える。

「なんで！」

「だって考えなよ…酷い言い方かもしれないけど、幸せな結末ではないでしょ。重いよ…治らないんでしょ？それはきつと、愛情じゃなくて、同情だよ。もし、愛情だったとしたら、和宏が他に誰も好きになれなくなっちゃうよ…治らない、いつまで続くかも分からない、いつ…死んでしまっても分からないのに…ムリだよ、やめな」

陽子の言葉が現実として正しい事は分かっている。和宏も考えたことが無いわけではない。しかし、今の心境では、素直にその言葉を受け止める事はできなかった。

「あんなに、ちやかしてたくせに…」

「あんたバカ？冗談と現実の区別もつかないの」

「そんな事を言ったら、皆一緒だろ？じゃあ、おまえはアレか、付き合った彼が晴海先輩と同じになったら別れるのか」

「そういう事を言ってるんじゃない！起こってしまった問題と、これから起こる問題では、受け止め方が全然違う！」

興奮した陽子がグラスのビールを飲み干すと、自棄になったように手酌でビールを注ぐ。

決して陽子が間違っているとも思わなかった和宏は、返す言葉が無かった。

《kazuhirō 男として、晴海先輩のそばにいたい。。できればこれからも、ずっと。。》

《ただ陽子は反対する。。間違っているのは俺なのか。。。》

《yusuke @kazuhirō ゴメン。。僕も陽子の意

見に賛成です。。。僕は和宏が

幸せであってほしい。。。陽子の言葉は、きっと優しさです。。。

》

《kazuhirou @yusuke オマエまで…わかりました。。自分で考えます。。》

翌日、病室で晴海に会う事はできなかった。

認知症の進行を調べる為の脳検査や、質問形式の簡易的なテストを受けているらしく、和宏は今日録音したカセットテープを枕元に置き、病室を後にした。

《kazuhirou 晴海先輩の検査の結果が、よい便りな事だけをただ、願います。。。》

そのまま仕事に出勤し、一日の仕事を終えて自宅に帰ると、アパートの前に人影がある。よく見ると陽子の姿だった。

「おまえ…よく家まで分かったな」和宏は驚いた顔で話す。

「真由美ちゃんに聞いたのよ…」

陽子は袋から缶ビールを取り出し、差し出すと、二人はその場に腰を掛けて乾杯をする。

「ぬるっ！全然冷えてねえ、何時からいたんだよ…電話くらいすればいいじゃねえか」

「直接謝りたかったのよ、昨日は、なんか…ちょっと言い過ぎたかなあって」

陽子も温い缶ビールを飲んで、渋い顔をする。

「へえ…珍しい。でも大丈夫だよ、気にしてないから。陽子の考えは尤もだ、間違っていない。例えるならば、教師って仕事らしく正しい考え方だよ。だけど、俺の考えは生徒の考え方だ。だけど、その考え方も間違っているとは言えないんじゃないか？」

「そう思ったから来たのよ…その通り、生徒に言われて思ったの。今日、風邪を引いているのに、区の音楽祭が近いからと言って、部活の練習に参加した生徒がいたの。でも、私は風邪が皆にうつれば、皆が出れなくなるからと言って練習に参加させずに、家に帰宅させた。そうしたら、ある生徒に言われたの『先生の言っている事は正しいけど、頭ごなしで相手の気持ちを考えていない』って…そう言われたら、昨日、和宏と話した事も思い出した…」

和宏は温い缶ビールを飲みながら、黙って話を聞いている。

「だからね、和宏、あんたの気持ちを止めようなんて、もう思わない。けど…っただけ約束して、一人で抱え込もうとしないで…そして、耐え切れなくなったら、受け止めるだけじゃなくて、逃げる事も大切だと理解して…じゃないと、自分まで壊れちゃうから…」

陽子がこんなに真剣に話しをしているのを、和宏は初めて見た。晴海が最悪の状態になってしまった時に、そこから逃げ出そうなんて考えた事もなかったが、陽子の言葉は、きつと優しさなんだと受け止めた。

「分かったよ、ありがとう…おまえも、女がこんな道端で酒なんか飲んでないで、早く家に帰れ。そして明日、ちよっと早起きして、朝、その風邪ひいていた生徒に寄って行け。自分が酷いと言われた

生徒の事よりも、今みたいに、陽子が酷いと思う事を言ってしまった人間を気遣えよ…それができたら、おまえはいい先生だ…」

陽子は、その言葉に頷いて帰った。

週末の土曜日、その日の集まりは、五人の母校である中学校に集まった。

陽子が手配してくれた為、空き教室を午前中だけ借りることができた。

五人は練習よりも思い出に浸りながら、学校中を歩き廻る。職員室に立ち寄ると、吹奏楽部の顧問である近藤義文に挨拶をする。五人より少し年上位の若い男性教師であり、彼とは初対面であった。

「あなたはアンサンブルコンテストの全国大会で、金賞を受賞されたらしいですね。今日は現役の生徒も練習しているので、時間があれば、是非、指導もして行って下さい。」

五人は快く引き受け、職員室を後にした。

「今日はね、後でスペシャルゲストも来るよ」陽子がニヤニヤとしながら話しをする。

空き教室を借りて練習を始め、先週と同じように『パツヘルベルのカノン』を合わせる。その後で重徳が持ってきた、イベントで演奏する楽譜を受け取り、音合わせをする。ジャズやポピュラーミュージックが多く、馴染みがある音楽ばかりなので、初見でも演奏しやすい物ばかりであった。

残念な事に、淳一郎はプロのオーケストラに所属している為、しがらみも厳しいのか、その日のイベントには参加できないという事

である。

一通りの曲を合わせ終わると、教室の扉が開き拍手が聞こえた。

「いやあ、さすが、以前に増して素晴らしい演奏だ！」

「井上先生！」

サプライズとして呼んだ、陽子本人以外は久しぶりの再会に驚く。月日が経った事から、白髪などが増えて、少し老けたようにも見えるが、面影は変わっていない。

「みんな大きくなったなあ・・ハハ、当たり前か。でも、すっかりとした大人の顔になっている。宗像は昔より、顔が優しくなったんじゃないか？」

「中身は全然変わってないですよ、我が強くて、自分勝手に、昔のまま」陽子がまたちやかす。

「いやあ、音を聞けば分かるよ…高山と後藤は格段に技術が上がった、私が教わりたい位だ。尾崎と河村は女性らしく、いい音になった。それは、大人の女性にならないと出来ない魅力だよ。宗像は、暫くさぼってただろ、まあ、昔が出来すぎたんだ。でも皆と合わさった、いい音になっている。素晴らしい音楽だ！実に素晴らしい！」

井上は話をする、再び五人に拍手を贈った。

### 『経過報告』

今日の彼女にも、問題は特に見当たらない。本当に病気なのかを疑ってしまう位だ。

何故かと言うと、渡されたばかりの楽譜を、初見でもスラスラと演奏してしまう。これには本当に驚いた。彼女は楽器を本当に楽しそうに吹いている

中学生の部員には、指導するということよりも、あれやこれや話す生徒の話しを、黙ってニコニコと聞いている。あんなに何人もがいつぺんに話し掛ける事を理解していたら、それは病気どころか聖徳太子と同じだ。

あえて気になる事…いや、個人的に寂しい事としておきます。以前より口数は減った気がします。

今日、恩師である井上先生と再会した時に、みんな童心に帰り話をしていましたが、彼女は先生の話聞いて、だまって涙を流していました…

心配した井上先生が、彼女の頭を優しく撫でると、涙を流しながらニコニコと笑っていました。

きっと、不安でたまらないのだと思います。

《kazuhirō 天国にもトランペットはありますか？聞こえていたら

裕輔もいっしょに演奏しましょう。きっと先輩もよろこびます。》



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7670x/>

---

天国からのツイート

2011年10月26日13時01分発行